

『説文解字』 解釋における段玉裁の複舉字説と錢大昕の連讀説

白石 將人

一 はじめに

『説文解字』（以下では『説文』と略稱する。）は後漢の許慎の手になる中国最古の體系的字書である。南唐の徐鍇（小徐）が注釋付きの校訂本を著わし、また北宋には徐鍇の兄である徐鉉（大徐）による校訂本が作られた。それぞれ小徐本と大徐本と呼ばれる。しかし、南宋の李燾が大徐本の字の順序を『集韻』によつて改めた『説文解字五音韻譜』（以下では『五音韻譜』と略稱する。）が後世に流行したため、大徐本、小徐本は一時期世間から姿を消し、明代には『五音韻譜』が大徐本そのものと誤解されるに到った。しかし、大徐本、小徐本は清代に到つて再び刊行され、現代に傳わっている。^①

許慎が著わした當時の『説文』の原貌は今となつては否として知らない。大小徐校訂以前の唐代の舊を伝えるものとしては、『木部』殘卷と『口部』殘卷が傳わるが、いずれも斷簡にすぎない。^②

清代になると漢學の隆盛とともに後漢における經書解釋が注目されるようになる。後漢當時の人に、「五經無雙許叔重^③」と言われた古文書の大家である許慎にも光が当てられ、段玉裁が『説文解字注』を著

わした。ただ、段玉裁は、許慎當時の原貌を復原しようとして、獨自の理解に基づいて『説文』本文に大きく手を加えており、單なる注釋を附したに止まらない。このような作業の中で、段玉裁は『説文』原著にはいくつかの義例が存在することを主張して、それに基づいて『説文』を解釋した。その義例の一つに、複舉字説というものがある。

複舉字説とは、『説文入門』^④に

問 説文の原形として「篆文の次に、それを隸書で複た舉げた」（そのあとに説解が来る）というのは堅い主張のようですね。

と言っているように、『説文』原本では、親字の小篆のすぐ下に隸書（漢代に通用していた字體）で、親字がもう一度書いてあつたはずであるという段玉裁の主張である。『説文』段注では、複舉字は「複舉篆文」や「複舉隸字」と呼稱されることもあるが、本稿では「複舉字」という呼稱で統一する。

複舉字説に關する先行研究を紹介すると、王笑が「説文解字注複舉

現象研究^③」で、『說文解字注』中に關聯する箇所は全部で六十一箇所あると述べ、それらを五つの類型に分けて分析している。また臺灣の郭怡雯に「說文複學字研究」がある。郭氏の論文は、清代に關しては主に段玉裁以後の狀況に重きを置き、また最終的には許慎の原貌の復原を視野に入れている。郭氏の結論としては、段氏の推論は正しく、許慎の原著には複學字が存在していたということになる。また、段氏は既に相當数の複學字を補っているが、まだ補うべき箇所が多くあり、それらについて郭氏は實例を擧げて補っている。一方、郭在貽は段氏の義例（後述）への理解と複學字の存在を否定している。本稿は複學字說出現の前提として清儒の『說文』評價を概觀し、段玉裁と錢大昕の『說文』解釋の相違を検討することを通じて兩者のロジックの違いを分析する點において、先行研究と問題關心を異にするものであると思ひ、敢えて發表する次第である。

本稿においては學者相互の間の學說の違いに焦點を當てているが、當時の學者の文章中には、誰の說を批判したかは明言されていないことが多いため、論争になつていったのかどうかははっきりとは分からない。ただ、當時の學者同士は個人的な交流もあり、お互いの學說について知る機會があつたであろうことは想像される。よつて、再構成して論争のような形態を採用するのも、學說史の敘述の一形態として認められるものであると思ふ。

なお、大徐本は中華書局の一篆一行本の影印本に、小徐本もやはり中華書局の影印本に基本的に依據している。また、本稿において原文中の小篆を示す必要がある場合は、字に傍線を付した。その他に字體を理解に差し支えない範圍内で改めた箇所がある。

二 『說文』「參」字條の解釋から見た 清儒の『說文』評價の變遷

現在では文字の寶典としての地位が確定している『說文』であるが、中國の歴史を通じて評價が常に高かつたわけではない。清初ではむしろ評價は低かつたが、その後乾嘉に至り評價が高まつた。この經過を、『說文』「參」字條の解釋の變遷を通して以下に略述する。

（一）顧炎武

顧炎武（一六一三（萬曆四二）年—一六八二（康熙二一）年）はその『日知錄』『說文』條に^④

自隸書以來、其能發明六書之指、使三代之文尙存於今日、而得以識古人制作之本者、許叔重《說文》之功爲大。後之學者、一點一畫莫不奉之爲規矩、而愚以爲亦有不盡然者。且以六經之文、左氏、公羊、穀梁之傳、毛萇、孔安國、鄭衆、馬融諸儒之訓、而未必盡合。況叔重生於東京之中世、所本者不過劉歆、賈逵、杜林、徐巡等十餘人之說、而以爲盡得古人之意、然與否與？

隸書が現われて以來、六書の眞意を明らかにでき、三代の文化を現代に伝え、古人が制度を作つた根本意義を知ることができるのは、許慎の『說文』の功績に依るところが大きく、後代の學者は、一點一畫に至るまで、『說文』を規範として遵守している。だが、私は必ずしもそうすべきだとは思わない。六經の解釋は、左氏、公羊、穀梁の三傳にしても、毛萇、孔安國、鄭衆、馬融などの學者の注釋にしても、全てが合致するわけではない。まして、

許慎は後漢の中頃に生まれ、彼が基づいたのは、劉歆、賈逵、杜林、徐巡等十數人の説でしかない。なのに、古人の眞意を全て得ていると見なすのは、果たして如何なものであろうか。

と言ひ、「東京之中世」の人とされた許慎の著書である『説文』に対する顧氏の評價は必ずしも高くない¹¹⁾。そして「今舉其一二評之」と言ひ、『説文』の缺點を擧げるがその中で、『説文』「參」字條が「參商星也」となっているのを批判して、

若夫訓參爲商星，此天文之不合者也。

そもそも參の意味を商星であるなどとしているのは、天文において合わないものである。

と言っている。しかし、それ以上この問題に關して考察を加えていくわけではない。ただ、間違いだとして指摘しているだけである。

(二) 朱筠

朱筠(一七二九(雍正七)年—一七八一(乾隆四六)年)は一七七三(乾隆三八)年に、汲古閣本に基づいて大徐本を刊刻した。その序文から、彼の『説文』觀を窺うことができる。顧炎武の說に對しては、

惟近日「顧氏炎武脩紹絕業，學者所宗」，而於是書亦有不盡然之言。竊恐瞽說附聲，信近疑遠，是不可以不辯。

思うに、近頃「顧炎武は絶學を繼ぎ、學問の權威である」などと言われているが、彼の『説文』に關する見解は不十分である。

個人的には、付和雷同して、近くを信じて昔を疑うことになるのを恐れている。このことについては、一言せざるを得ない。

と言つて批判的であり、さらに、

訓參爲商星，乃連大書，讀「參商，星也」，即如《水部》「河水出惇煌塞外」，「渤澤在昆侖下」之例。明參與商同爲星，非「參商」，亦不知也。

參の意味を商星だとしているように見えるものは、親字と繋げて讀んで「參商が星である」と讀むべきなのである。ちょうど『水部』の「黄河は敦煌の塞外に發する」や「渤澤は昆侖の麓にある」といった例のようにである。參と商がともに星であると述べているのであつて、參が商であると言っているのではない。(顧氏は)この點についても分かつていない。

と言っている。すなわち、「參 商星也」という『説文』の親字と説解は、「參が商星である」と理解するべきではなく、「參と商が星なのである」と理解するべきだというのである。

なおこの考えは、錢大昕が、

予友朱學士(筠)竹均重刊《説文》，撰序一篇，頗取予説¹²⁾。

我が友の朱筠は『説文』を重刊するに際して、序一篇を書いたが、そこでは私の説を多く取り入れてくれた。

と言っているところを見ると、朱氏独自の考えではなく、錢氏に影響

されたものの如くである。¹⁴⁾ 錢氏の理解については後述する。

(三) 孫星衍

孫星衍（一七五三（乾隆一八）年—一八一八（嘉慶二三）年）は一八〇九（嘉慶一四）年に大徐本『説文』を刊行した。孫氏の『説文』評價は『問字堂集』卷四の「與段大令若膺。書」に見える。

及見顧炎武《日知錄》指駁《説文》，又可撫掌。……至詆《説文》參爲商星，爲不合天文……則顧氏尤疏陋。據《説文》「參商」爲句，以注字連篆字讀之，下云「星也」，蓋言參、商俱星名。《説文》此例甚多，如「偃佺，仙人也」之類，得讀「偃」斷句，而以「佺仙人」解之乎？

顧炎武の『日知錄』が『説文』を批判しているのを見て、手を軽く打った。……『説文』が參の意味を商星だとしているのをそしって、天文に合わないとしているのは、……顧氏のひどく疏漏な点である。『説文』が「參商」で區切り、説解を篆文と繋げて読み、以下に「星である」と言っているのによれば、思うに、參と商がともに星の名前であると言っているのだ。『説文』には、このような例はとても多い。例えば、「偃佺，仙人也」のようなものを、「偃」で區切って、「偃」の意味が「佺仙人」であるなどと理解できようか。

孫氏も、許慎または『説文』に缺陷があるとは言わず、『説文』の記述を是とした上で、「參」字條は、説解を上篆文と續けて讀むのだという彌縫説を述べ、さらに同様の例を擧げている。孫氏は「許叔

『説文解字』解釋における段玉裁の複學字説と錢大昕の連讀説

重以字解經，鄭康成以經解經，孔門之外，身通六藝，古今惟此二人。（許慎は字によつて經を解釋し、鄭玄は經によつて經を解釋した。孔子の門人をのぞけば、六藝に本當に通じたのは、古今でこの二人だけである。）¹⁵⁾ と言ひ許慎を高く評價しているが、その許慎の『説文』に不合理な點があるとは言わない。

このように見てくると、顧氏のような「參」字條を許氏の見識が低いための間違ひとしてそのまま論じない態度とは、乾嘉の考證學者の態度は異なつてゐることが解る。¹⁷⁾ むしろ「參」字條をどのように合理的に理解するかということが問題になつてゐる。その中で提出された讀み方が、「參 商星也」を「參は商星である」と讀むのではなく「參と商は星である」と理解する考え方である。

三 錢大昕の「説文」連上篆字爲句」説

錢大昕（一七二八（雍正六）年—一八〇四（嘉慶九）年）は吳派の大學者であり、その點では顧炎武の後を受けた人物である。だが、『説文』に對する評價は、顧氏とは異なつてゐる。錢氏には『説文』に關する專著はないが、その『潛研堂文集』¹⁸⁾ に彼の『説文』評價が見える。

問：許叔重《説文解字》十四篇，九千三百五十三文，不見於經典者，幾十之四。文多而不適於用，竊所未喻。

曰：今世所行九經，乃漢、魏、晉儒一家之學。叔重生於東京全盛之日，諸儒講授，師承各別，悉能通貫，故於經師異文，采摭尤備。

問 許慎の『説文解字』十四篇、九千三百五十三文字のうち、經典に見えないものが、四割を占めている。收録している文字が

多いのに、使用に適さないのは、個人的には理解できないがどういうことであろうか。

答 現在の九經はそれぞれ漢、魏、晋のある一つの流派の説に過ぎない。許慎は後漢の全盛期に生きていたが、その當時はたくさんの方々が講義をしていて、傳承がそれぞれ別であつたが、その全てに通じていた。だから、經學者の異なつたテキストの文字をくまなく集めてあるのだ。

許慎を評して「生於東京全盛之日」と述べる錢氏は、朱氏、孫氏と同じく、許慎を高く評價している。

また、『十駕齋養新錄』の『説文』連上篆字爲句」條では以下のよう述べている。

許君因文解義，或當疊正文者，即承上篆文連讀。如「味爽，旦明也」，「𦔻響，布也」，「湫隘，下也」，「𦔻嘉，善肉也」，「燧燧，侯表也」，「詰訓，故言也」，「𦔻癡，不聰明也」，「參商，星也」，「離黃，倉庚也」，「𦔻周，燕也」，皆承篆文爲句。

許慎が文字によつて意味を説明する際に、親字を繰り返すべきなように見えるものは、親字の篆文と繋げて讀むのだ。例えば、「味爽，旦明也」，「𦔻響，布也」，「湫隘，下也」，「𦔻嘉，善肉也」，「燧燧，侯表也」，「詰訓，故言也」，「𦔻癡，不聰明也」，「參商，星也」，「離黃，倉庚也」，「𦔻周，燕也」のようなもので、どれも篆文と繋げて一文となつてゐる。

親字即ち篆文から説解まで繋げて讀むべきである（以下、このような

考え方を本稿では「連讀説」と呼稱する。箇所があると錢氏は述べ、その例を擧げてゐる。各例の一字目は、『説文』では小篆であるが、その小篆と以下に續く説解を繋げて讀んでゐる。さらに個別の字だけでなく、いくつかの部首全體についても言及してゐる。

諸山水名云「山在某郡」、「水出某郡」者，皆當連上篆讀。

山と川の名前の字の後に、「山在某郡」、「水出某郡」とあるのは、どれも篆文と繋げて讀むのだ。

錢氏の説に適合する具體例を擧げると、『山部』の「𡵓 山在齊地」を「𡵓山は齊地にある」と讀むべきで、また『水部』「灇 水出巴郡宕渠」を「灇水は巴郡の宕渠から流れ出る」と讀むべきだということになる。さらに、

《艸部》「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」諸字但云「艸也」，亦承上爲句，謂𦔻即𦔻艸，𦔻即𦔻艸耳，非艸之通稱也。「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」諸字但云「菜也」，亦承上讀，謂𦔻即𦔻菜，𦔻即𦔻菜也。今本《説文》「𦔻」字下云「𦔻菜也」，此校書者所添，非許意也。

『艸部』の「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」のこれらの字の説解はただ「艸也」とあるが、これらも親字と繋げて一文をなしている。「𦔻」字は「𦔻艸」という意味であり、「𦔻」字は「𦔻艸」という意味であるということで、これらの字の意味が、一般的な草という意味であるということではない。「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」、「𦔻」のこれらの字の説解には「菜也」とだけ書いてある

が、これらも親字と繋げて讀むのであり、「葵」字は「榮菜」という意味で、「葵」字は「榮菜」という意味であるということである。今本の『説文』の「莧」字の説解に「莧菜也」とあるが、これは後世の校正者が「莧」字を加えたのであり、許慎の本意ではない。

と述べ、『艸部』の字で、説解が「艸也」、「菜也」になるものについて錢氏の説による解釋を説明している。錢氏の連讀説は、個別の字だけではなく、多くの字に適用されていることが分かる。この次の部分では、錢氏の義例への考え方が示されている。

古人著書簡而有法，好學深思之士當尋其義例所在，不可輕下雌黃。以亭林之博物，乃譏許氏訓參爲商星，以爲昧於天象，豈其然乎？

古人の著作には、簡潔ではあるが、法則が存在している。學問をするものは、その義例がどこにあるかを探るべきで、輕率に文章を改めるべきではない。顧炎武の博學をもつてしても、許慎が參の字義が商星であるとしているのを、天文に通じていないと言つてそしつてゐるが、はたしてその通りだろうか。

さらに、

『人部』「倝」字下云「倝倝仙人也」，「倝」字下云「倝也」亦承上讀。宋槧本不疊「倝」字，汲古閣本初印猶仍其舊，而毛斧季輒增入「倝」字，雖於義未乖，而古書之眞面目失矣。

『説文解字』解釋における段玉裁の複舉字說と錢大昕の連讀説

『人部』の「倝」字の説解に「倝倝仙人也」とあり、「倝」字の説解に「倝也」とある。これらも、親字と繋げて讀むのだ。宋刻本は「倝」字を重ねておらず、汲古閣初印本もその舊態をなお保存していたが、結局毛辰が「倝」字を増し加えてしまった。意味の面から言えばおかしくはないが、『説文』の眞面目は失われてしまった。

と述べる。汲古閣の大徐本には、毛晉が主導して明末に刊行作業が開始された初印本と、子の毛辰が自らその晩年に刊行した第五次校改本との間で、テキストに無視できない差異がある。この違いについては、高橋由利子と董婧宸が詳論している。毛辰（斧季）は小徐本の「倝」字條が、説解を「倝倝古仙人名也」とするのに影響されて「倝」字を補つたのだろう。

以上錢大昕の説を見てきたが、錢氏の説は朱筠、孫星衍と同じく、親字の小篆と説解を繋げて讀めば、『説文』の不可解な點が解消されるという考えである。この連讀説は、『説文』解釋の歴史の上では評價の高い説である。任學良が肯定的に紹介し、姚孝遂は「這一體例是錢大昕的一大發明」（この體例は錢大昕の大發明である）と述べて、『説文』閱讀の際に有用であるとしている。この考えと一線を畫すのが段玉裁の複舉字說である。

四 段玉裁の複舉字說

段玉裁（一七三五（雍正一三）年—一八一五年（嘉慶二〇）年）は、連讀説が朱筠、孫星衍、錢大昕によって唱えられていた中、連讀説を否定して複舉字說を唱えた。この説は彼の『説文解字注』「靈」字條

(一上三八表(以下『說文解字注』に關しては、上海古籍出版社影印の經韻樓本の卷數と葉數を示す。))に端的に説明されている。

說解：靈 巫也。

段注：各本「巫」上有「靈」字，乃複舉篆文之未刪者也。許君原書，篆文之下以隸複寫其字，後人刪之，時有未盡。此因「巫」下脫「也」字，以「靈巫」爲句，失之，今補「也」字。

段注 各本は「巫」の上に「靈」字があるが、これは複舉字の削り残されたものである。許慎の原本では、篆文の下に隸書でその字を繰り返して書いた。後世の人がこれを削ったのだが、時々削り残した場合もある。ここでは、「巫」字の下に「也」字を脱してしまったので、「靈巫」を一句としてしまい、本來の意義が分からなくなってしまったのだ。今、「也」字を補う。

許慎『說文』の原本では、篆書の親字の下に隸書で親字がもう一回書いてあったと段氏は述べる。この條では大徐本、小徐本ともに「靈巫以玉事神」とあるのを、段氏は說解の第一字目の「靈」字を許慎以後の人が、複舉字を削る際に削り残したものと見なして今削り、また「巫」字の後に「也」字を補っている。

ここで分かることは、複舉字は後世の人によって往々削除されているが、段氏は複舉字を削ったこと自體を非としていたのではなく、字義の解釋に必要な複舉字を削ったことを批判しているのである。よって、削るべきであったのに削り残されたと段氏が判斷した複舉字は、段氏は改めて削っている。

錢氏の連讀説と比較するのならば、錢氏が親字の小篆と說解を繋げ

て讀むように主張しているのに對し、段氏は、許慎が小篆の下に隸書で親字を繰り返して書いていたので、その字とその下に續く說解を繋げて讀むように主張しているわけである。この二者の間にどのような差異が存在するのであろうか。また段氏は既に連讀説が存在しているにもかかわらず、何故わざわざこのような理屈を考え出したのであろうか。

意味の解釋においては兩者に差は無い。しかし、段氏には複舉字說を主張せねばならない理由があつた。段氏は「一」字條(二上表)において、

以字形爲書，俾學者因形以考音與義，實始於許，功莫大焉。

字形を根本において一書を著わし、字形によって字音と字義を讀者に考えさせるのは、實に許慎に始まるものであり、功績はとても大きい。

と言う。即ち、段氏は『說文』とは字形を基にして、音と意味を説明した書物であると見なしている。『說文解字注』「莧」字條(二下六裏)では、「莧」字を例に挙げ、形と義の解釋それぞれの關係について解説している。

「莧」者，字形；「莧菜也」者，字義。如《水部》「河」者，字形；「河水也」者，字義。若云「此篆文是莧菜也」、「此篆文是河水也」。概以爲複字而刪之，此不學之過。

「莧」という小篆は字形を説明しているのであり、說解の「莧菜也」は字義を説明しているのだ。また『水部』の「河」という

小篆は字形を説明しているのであり、説解の「河水也」は字義を説明しているのだ。「この篆文の意味は葵菜である」、「この篆文の意味は黄河である」と言っているようなものである。（複學字を）一概に字が重なっているからといって削ってしまったのは、學問の程度の低いものの過ちである。

と言い、さらに「河」字條（十一上 一裏）において、

説解：河 河水。

段注：各本「水」上無「河」字。由盡刪篆下複學隸字，因并不可刪者而刪之也。許君原本當作「河水也」三字。「河」者，篆文也；「河水也」者，其義也，此以義釋形之例。毛傳云「治，水也」，「渭，水也」，此釋經之例。

段注 各テキストには、「水」の上に「河」字がない。篆書の下にあった複學字を全て削った際に、削るべきでないもので削ってしまったのだ。許慎の原本では、「河水也」三字であつたはずである。「河」は、小篆の字形を説明しているのであり、説解の「河水也」は、字義を説明しているのである。これは、字義によつて字形を解説する方法である。一方、毛傳が「治は川である」、「渭は川である」と言っているのは、經文を解説する方法である。

と述べている。これから段氏の『説文』に対する理解がうかがえる。『説文』は字書として、字形を根本として字音と字義を説明している書物なのである。親字の小篆は字形を説明するものであり、一方、説

『説文解字』解釋における段玉裁の複學字說と錢大昕の連讀說

解はその小篆の字義を説明するものである。このようにそれぞれ役割が異なるのだ。具體例を挙げると、「河 河水」ならば、「河」という小篆は、字形を説明し、それに續く説解は、「（河）という字は」黄河の意味である」と言っているのだ。小篆と説解を繋げて讀むことは、説解に説明される存在である親字を、説明する存在である説解の一部にしてしまうことになってしまう。言い換えれば、小篆にも意味の解説の役割の一部を擔わせると、字形を説明している小篆と、字義を説明している説解に、重複部分が生じてしまうことになる。「河」字條の段注に見られたように、字形の説明と字義の説明を峻別する段氏としては、このようになることは受け入れ難いことであつた。また、この點で經文を説明する毛傳などが、「治は川である」、「渭は川である」というような形式で注釋を附しているのとは、『説文』の注釋の態度は異なるのである。『説文』は川の名前の字ならば、何という名前の川であるかということの説明するのに對し、毛傳はただ單に、「川である」ということを説明しているに過ぎない。もし、複學字がなく連讀説を採用すれば、「河，水也」となり、毛傳と同じ注釋形式になつてしまう。段玉裁の背後にはこのような認識があつて、小篆と説解を繋げて讀むことを許容することができず、故に複學字という存在が、説解の一部として必要だつたのである。

勿論、段氏は『説文』とはかくあるべきだという結論を先に決めるというような演繹的な思考法からだけで、複學字說を唱えたわけではないだろう。例えば、「燧」字條（十上五三表）で、

説解：燧 燧燧，候表也。

段注：各本無「燧」字，今依《文選》注補。

段注 各テキストには、「燧」字がない。今《文選》注によって補う。

と言っているが、これはあくまで段氏の理解によれば、『文選』の張協『雜詩十首』の李善注が「《說文》曰『烽燧、候表。』」というように、『說文』を説解に「烽」字がある形で引用しているのによって、字體をやや變えて、複學字「燧」を補っている譯である。また、「覓」字條（二下六裏）では、

説解：覓 覓菜也。

段注：「菜」上「覓」字、乃複寫隸字刪之僅存者也。

段注 「菜」の上の「覓」字は、複學字の削り残されたものである。

と述べている。

このように、他書の引用例や『說文』のテキストから複學字の痕跡を見つけて、そこから歸納的に複學字説を作り上げたということも十分に推察できることである。

五 錢氏の連讀説と段氏の複學字説の對比

以下に、錢大昕の説と段玉裁の説でどのような差異が生じているかという点についていくつか具體的に例を擧げて對比してみたい。兩者はそれぞれ複學字を補うか、小篆と説解を連續して讀むのかという立場の違いがあるが、個別的な對應の仕方は様々である。

(一)「參」字條

諸家の間で問題になっている「參」字條であるが、段氏のロジックはどんなものであったのであろうか。段注の「參」字條（七上二三表）を見てみよう。

説解：參 商星也。

段注：「商」當作「晉」，許氏記憶之誤也。《左傳》「子產曰：『后帝遷閼伯於商丘，主辰，商人是因，故辰爲商星；遷實沈於大夏，主參，唐人是因，以服事夏商。』」及成王滅唐，而封叔虞，故參爲晉星。』依此則「商」當爲「晉」明矣。或云：「此以篆文參連商句絕，釋爲『星也』。」夫苟汜釋爲星，安用「商」字？「參商」之云起於漢時辭章，聯綴不倫，許君何取？

段注 「商」字は「晉」字に改めるべきである。許慎の記憶の誤りである。『左傳』に、「子產が『堯（后帝）が閼伯を商丘に移し、辰を司らせた。商人はこれに従ったので、辰が商の星となった。また、實沈を大夏に移し、參を司らせた。唐人はこれに従い、夏と商に仕えた。成王が唐を滅ぼすと、叔虞を唐に封じたので、參は晉の星となった。』と言った。」とある。これに依れば、「商」字を「晉」字に改めるべきなのは、明らかである。ある人が、「こは、篆文の參と商を繋げて一文とするべきで、ともに星の意味であると言っているのだ」と言っている。だが、「ともに星の意味である」とするのには、どうして「商」字を用いるだろうか。「參商」という表現は漢の時の文學作品に始まり、仲が悪いことを表わす。許慎がこのような言い方を用いるはずがない。

段氏はここでは實名は擧げていないが、「或云」以下は朱氏、孫氏、錢氏などのことを指し、彼らに對する反論であると考えられる。また、段氏は「許慎の記憶の誤りである」と言っているが、それはこの一條限りのもので、『説文』全體に對して否定的な評價を下すつもりは毛頭無い。

參はオリオン座の三連星であり、一方、商すなわち大辰、大火はさそり座である。この二つは夜空に同時に現われることがない故に、兩立しないことの比喩にも使われる。この兩者を並べて、「ともに星の意味である」とは言わないであろうと言うのである。さらに、段氏は説解そのものを改めてはいないが、「商」字を「晉」字にするべきだと述べている。そのロジックは以下のようなものである。

『左傳』昭公元年條に以下のような説話が載せられている。帝嚳の息子である閼伯と實沈は兄弟仲が悪かった。そのため堯は閼伯を商丘に移し、辰星を祀らせた。そこで商人は、辰を自分たちの星とした。一方、堯はやはり實沈を大夏杜預注「今晉陽縣」に移し、參星を祀らせた。そこで唐人は、參を自分たちの星とした。その後成王が唐を滅ぼして、その地に晉の始祖である叔虞を封じたので、參は晉の星となった。^②段氏は許慎が『説文』を著わす際に、「晉」と「商」を取り違えたと考えた。

この點に關しては、錢大昕には段氏の批判を踏まえて書いたと思われる一文がある。やはり『潛研堂文集』^③に、

問：『春秋傳』、實沈主參，參爲晉星；閼伯主辰，辰爲商星。於天文參在西方，商在東方，故楊子雲云「吾不睹參辰之相比」也。
『説文』訓參爲商星，何昧於天象乃爾？

『説文解字』解釋における段玉裁の複疊字說と錢大昕の連讀說

曰：讀古人書，先須尋其義例，乃能辨其句讀，非可妄議。如此文本云「參商，星也」，「參」、「商」二字連文，以證「參」之从晶，本爲星名，非以商訓參。

問 『春秋傳』に實沈が參を司り、參が晉の星となり、閼伯が辰を司り、辰が商の星となった。天文において、參は西方にあり、商（すなわち辰）は東方にある。だから楊雄が「私は參と辰が並ぶのを見たことがない」と言つたのだ。『説文』で參が商の星（すなわち辰）であると言っているのは、なんと天文を理解していないことではないだろうか。

答 古人の書物を讀むには、まずその書物の義例を理解する必要がある、そこではじめて文をどこで區切ればよいのかが分かるのであつて、むやみに議論するべきではない。この箇所のように、もともと「參商，星也」と言っているのは、「參」、「商」二字を繋げて讀むべきで、「參」字が晶を構成要素としていて、本義が星の名前であることを説明しているのであつて、「參」字の意味が商であると言っているのではない。

錢氏は『左傳』の記事も、「參」と「商」とが段氏の所謂「聯綴不倫」であることも知つていたのだが、それでも連讀說を墨守する。

兩者の説の先後關係はつまびらかにしたい。『潛研堂文集』は嘉慶十一年（一八〇六）段玉裁序、即ち錢氏の没後に編集されている。『説文解字注』は嘉慶十三年（一八〇八）王念孫序が付されている。兩者の前後關係は明確にできないが、前提としている事柄が同じであつても、結論が異なることは見て取れる。

(二)「詁」字條

「詁」字條(三上十三裏)を次に見てみよう。

説解：詁 訓故言也。

段注：故言者、舊言也、十口所識前言也。訓者、說教也。訓故言者、說釋故言、以教人、是之謂詁。

段注 「故言」というのは、古くからの言葉で、誰もが知っている昔ながらの言葉である。「訓」とは教え諭すことである。「訓故言」とは、古くからの言葉を解説して、人に教えることで、これを「詁」と言うのだ。

説解：《詩》曰「詁訓」。

段注：此四字當爲《詩》曰「告之詁言」六字、無疑。毛傳曰『詁言、古之善言也』、以『古』釋『詁』、正同許以『故』釋『詁』。陸氏所見《說文》未誤也。自有淺人見《詩》無「告之詁言」、因改爲《詩》曰「詁訓」、不成語耳。

段注 この四字を「詩」曰「告之詁言」の六字に改めるべきなのは、疑いない。毛傳は「詁言とは古の善言のことである」と述べていて、「古」字で「詁」字を説明している。許慎が「故」字で「詁」字を説明しているのとちょうど同じことである。陸徳明の見た「説文」はまだ原貌を存していた。浅はかな人が、「詩」に「告之詁言」という語がないので、「説文」のこの箇所を「詩」曰「詁訓」と改めてしまつて以來、意味をなさなくなつてしまつたのだ。

ここでは、錢氏と段氏とで「《詩》曰「詁訓」」という一句に對する

態度が違う。錢氏は「《説文》連上篆字爲句」條で述べているように、この引用を信じて、「毛詩」本文に「詁訓」という語が存在したと認定して、故に親字の小篆と説解を繋げて「詁訓、故言也」と讀むのだが、段氏にしてみれば、「《詩》曰「詁訓」」という引用が間違つていて、そもそも「詁訓」なる語は「詩」にはなく、「詁訓、故言也」という錢氏の理解も認められない。この引用は「告之詁言」に訂正されるべきであるとする。なお、この一句は、「詩・大雅・抑」の「告之詁言」を「毛詩音義」の「《説文》作「詁」、云：「詁、故言也。」」によつて改めたものである。毛傳の引用文も段氏は同様に改めている。「浅はかな人が、「詩」に「告之詁言」という語がない」と思つたというのは、その人が見た「詩」の文が、今本と同じ「告之詁言」に改められていたので、「説文」が引用している「告之詁言」という語を探し當てられなかったということである。

ここでは段氏は複舉字を補うわけではないが、「詁」の字義は古くからの言葉で教え諭すことである」と釋し、錢氏の連讀説を否定する。段氏の經書の本文まで巻き込んだ理解が錢氏の理解よりも説得力を發揮している。

(三)「離」字條と「凍」字條

上記では段玉裁の説に説得力がある例を見たが、次は段氏の説に主觀的要素が強く見られる例を「離」字條(四上二七表)と「凍」字條(十一上二二裏)から見えてみよう。

説解：離 離黃。

段注：逗。各本無「離」、淺人誤刪、如「嵩周」刪「嵩」之比。

依《爾雅音義》、《廣韻》補。

段注　ここで句を切る。各テキストには、「離」字がない。浅人が誤って刪ってしまったのだ。「舊周」の「舊」字を刪ってしまったようなものである。《爾雅音義》、《廣韻》によって「離」字を補った。

段氏はここで『經典釋文・爾雅音義』「驚」字條に「『說文』……云：其色黎黑而黃也，文釋云：離黃，倉庚也，鳴則蠶生。」とあるのと、『廣韻・支韻』「離」字條の義注に、「『說文』曰『離黃，倉庚。』」という引用があるのによつて、複舉字として「離」字を補っている。また、「凍」字條では、

說解：凍凍水。

段注：「水」上補「凍」字，以下皆同。

段注「水」字の上に「凍」字を補う。以下同じ。

としている。つまり、段氏は「凍」字條において複舉字説に基づき、特に根據を擧げてはいないが、「水」字の上に「凍」字を補い、また『水部』の字については同様の處置をとることを明言している。

しかし、錢氏はやはり「凍」字條などについて、

《廣韻・東部》「凍」字下引《說文》「水出發鳩山，入於河」，《魚部》「瀘」字下引《說文》「水出北地直路西，東入洛」，是陸法言諸人已不審許氏讀法矣。

『廣韻・東韻』の「凍」字條に『說文』を引いて、「水出發鳩山，

『說文解字』解釋における段玉裁の複舉字説と錢大昕の連讀説

入於河」と言い、『魚韻』の「瀘」字條に『說文』を引いて「水出北地直路西，東入洛」と言っているが、陸法言等も既に許慎の『說文』の本來の讀み方が分からなくなっていたのだ。

と述べて、『廣韻』における『說文』の引用例を擧げているが、その中で『廣韻・東韻』の「凍」字條の義注に『說文』曰「水出發鳩山，入於河。」とあるのが、連讀説の立場から見ても認められない状態になっていることを述べている。しかしながら、この『廣韻』の引用は、段氏の複舉篆文説にとつても不利になる例である。なぜなら、段氏の理解に従えば、『說文』「凍」字條の說解にはもともと「凍」字が複舉字として存在したはずなので、『廣韻』の引用にも當然、「凍」字が「水」字の上にあつてしかるべきだからである。

段氏は一方では、「離」字條で『廣韻』の『說文』からの引用例を用いて說解を改めているが、一方では、錢大昕が言及しているような、自説に符合しない『廣韻』「凍」字條の例を取り上げることはいらない。段氏の理屈を押し通す鋭さと同時に、その主觀性をうかがい知ることができる例である。

六 結び

本稿ではまず清代における『說文』への評價の變遷を簡単に述べた。汲古閣大徐本出現以前なので、顧炎武の見た『說文』は大徐本の字の配列を變えた『五音韻譜』であつたが、内容的には大徐本と大差ない。顧炎武の『說文』への評價は後代ほどには高くなかつたが、その後時代を経ると、『說文』への評價は高まり、朱筠、孫星衍のように『說文』を刊刻する學者が現われ、さらに錢大昕、段玉裁のように『說

文』を研究する學者が現われた。

そのような中、『説文』の解釋に不可解な點があるため、それを解消するために彌縫説が唱えられた。朱筠、孫星衍、錢大昕が唱えたのが、連讀説である。錢氏の連讀説は多くの疑問點を解消することができ、段玉裁により反駁されている。

段氏の複學字説は、『説文』の小篆は字形を説明するためのものであり、説解は字義を説明するためのものであるという、彼が獨自に打ち立てた『説文』の義例に立脚している。連讀説で『説文』の内容の矛盾は解消できるのであるが、段氏は彼が複學字の削り残した例であると認める箇所や、他書の引用例に依據して複學字説を主張した。この體系性を持った解釋を提示したことは段氏の強みではあるが、同時に自説に符合しない例を無視する主観的な側面も有している。

本論では、先行研究のように許慎の原著において複學字があつたかどうかや、錢氏と段氏の説の優劣を論じた譯ではない。兩説それぞれの背景にあるロジックの闡明を目指した。まず複學字説にせよ、連讀説にせよ、その出現の前提として、『説文』に一定の權威を認めて、その書物の範圍内には矛盾が存在しないと見なすということが重要であることが解る。もし、權威を認めなければ、顧炎武のように間違っていると批判すればそれまでである。一旦權威があると認められれば、その書物には本質的には間違いは無いはずであるから、矛盾しているように見える箇所も、實は間違いないのではなく、より高次の論理において矛盾してはいないと考える必要が出てくる。

そもそもこういったことは『説文』、小學に限定されない問題であると思われる。經學という學問自體がこのような傾向を持つている。經書というのは、成立も由來も異なる文章の集成である。しかし、一

旦經書の範圍が定まり、それに權威が付與されると、聖人の制作にかかる書物の中に矛盾があるはずがないというところから、整合性を持った解釋を作り出す必要が出てくる。このような作業は一見不毛のようにも思えるが、中國學術史の責務とは、中國人のこのような思考の歴史を丹念に辿っていくことが、少なくともその一部であるもののように思われるのである。

注

(1) 清朝における『説文』刊行の歴史については、倉石武四郎「清朝小學史話」が詳しい。『倉石武四郎著作集』(くろしお出版、一九八一年、九九—三一二頁)所收。唐から清代までの『説文』テキストの變遷については、白石將人『説文文本演變考』(『中大史學叢書』、中華書局、二〇二一年)を参照。

(2) これらは、『説文展觀餘錄』(『東方學報 京都』第十冊、東方文化研究所、一九三九年、一四五—一五四頁、高久由美「説文解字祖本への接近(上)——小篆の字形を中心として」(縣立新潟女子短期大學研究紀要第36集、一九九九、一二九—一三八頁)、唐寫本説文解字本部箋異注評』(莫友芝著、梁光華注評、貴州人民出版社、一九九八年)並びに『唐寫本説文解字輯存』(李宗焜編著、中西書局、二〇一五年)に書影が掲載されている。

(3) 范曄『後漢書・儒林傳』下、中華書局、二〇二二年、二五八八頁。

(4) 賴惟勤監修、説文會編、大修館書店、一九八三年、一五七頁。

(5) 王笑「説文解字注複舉現象研究」、『漢字文化』二〇一九年第二期、北京國際漢字研究會、四三—四八頁。

(6) 逢甲大學中國文學所碩士論文、二〇〇五年。臺北國家圖書館遠端碩士書庫所藏。檢索番號は820 035M 94-11。

(7) 郭在貽『新編訓詁叢稿』、浙江大學出版社、二〇一〇年、四三〇—四三一頁。

(8) 中華書局、二〇一六年。

(9) 中華書局、二〇二三年。

(10) 欒保羣、呂宗力校點『日知錄集釋 全校本』、上海古籍出版社、二〇一二年、一二〇二—一二〇四頁。

(11) 顧炎武の『説文』評價に關しては、王俊義『清代學術探研錄』（『社科學術文庫』、中國社會科學出版社、二〇〇二年、一〇五頁）に「顧炎武亦注重文字的研究，他對於漢代許慎的《説文解字》給予了極高的評價……但他也具體舉出許慎《説文》中的失誤與不足……」（顧炎武はまた文字の研究にも注意していて、彼は漢代の許慎の『説文解字』をととも高く評價していた……しかし彼は具體的に許慎の『説文』の中の誤りや不十分な點を指摘しもしている。）という記述がある。しかしながら、『日知錄』の前後を讀むと、顧氏は『説文』に高い評價を與えることに異を唱えており、段玉裁のように『説文』を利用して經學體系を再構築しようとするような學者がいた乾嘉の時代と較べれば、やはり相對的に『説文』評價はなお低かったと言えるだろう。

(12) 『四部備用』所收の朱筠刊大徐本卷頭の序文。今、『四部備用』本を影印した『説文解字四種』（中華書局、一九九八年、五一—六頁）に據る。

(13) 呂友仁校點『潛研堂集』、上海古籍出版社、二〇〇九、一七九頁。

(14) 劉盼遂『高郵王氏父子年譜』（『高郵王氏遺書』、江蘇古籍出版社、二〇〇〇年）所收に依る。の乾隆三八年條（四八頁）に「又代朱筠撰重刻《説文解字》序」とあるのによれば、この序文は朱筠自身の撰ではなく、王念孫の撰に係るようである。そうだとすると、王氏が錢説を取り入れたのかも知れない。劉盼遂はさらに考證を加えた上で『王石臚文集補編』に本文を收録している。（劉盼遂著述集・段玉學五種、遼寧人

『説文解字』解釋における段玉裁の複學字説と錢大昕の連讀説

民出版社、遼海出版社、二〇二二年、一九七—二〇二頁）

(15) 今、『孫淵如先生全集・問字堂集』（『續修四庫全書』第一四七七冊、上海古籍出版社、二〇〇八年、四二—四二五頁）に據る。

(16) 注（15）に同じく「與段大令若膺」書。

(17) 勿論、このようなことは、當時の學問の最先端にいる人々についてはじめて言えることである。例えば額勒布は一八〇七（嘉慶一二）年に大徐本（いわゆる藤花樹本）を刊行したが、その序文に「惟其文原本次第不可見，宋雍熙三年命散騎常侍開國子徐鉉等，新爲校定，列以四聲，加以反切，旁引李陽冰諸儒箋釋，而其書始成」（思うに、文字のものととの順序はもはや見ることができない。北宋の雍熙三年に散騎常侍開國子の徐鉉達に命じて、新たに校訂させた。四聲の順序でならべ、反切を加え、李陽冰等の學者の注釋も引用して、始めて現在の『説文』の形態ができたがった。（中華書局線裝影印本、二〇一二年、『序』一葉裏）などとして、さらに「矧叔重去古既遠，生於東京之中世，所本者不過劉歆、杜林、徐巡等十餘人之說……」（まして、許慎はいにしえから遠く隔たつていて、後漢の中頃に生まれ、彼が基づいたのは、劉歆、杜林、徐巡等十數人の説でしかない……）と言つており、當時でもいまだ顧炎武の認識を脱していなかった人もいた。

(18) 清朝の學派については、吉川幸次郎『清代三省の學術』（『吉川幸次郎全集』第十六卷、筑摩書房、一九九九年、三一—〇頁）の區分けに従つた。

(19) 注（13）前掲書一六四頁。

(20) 楊勇軍整理『十駕齋養新錄』、上海書店出版社、二〇一三年、五七一—五八頁。

(21) 張楊、馮達『論錢大昕的説文連篆讀研究』（『佳木斯大學社會科學學報』第三五卷第三期、二〇一七年、一一七—一一八頁）では、錢大昕は

『十駕齋養新錄』と『潜研堂文集』であわせて一三六箇所について連讀説を主張しているとしている。

(22) 高橋由利子「『說文解字』毛氏汲古閣本について」、『說文解字の基礎的研究—段玉裁の說文學—』、六甲出版、一九九六年、六七—七八頁。

(23) 董婧宸「毛氏汲古閣本『說文解字』版本源流考」、『文史』二〇二〇年第三期、中華書局、二〇二〇年、一八七—二二六頁。

(24) 任學良『說文解字引論』、福建人民出版社、一九八五年、七六—七八頁。

(25) 姚孝遂『精校本 許慎與說文解字』、作家出版社、二〇〇八年、二二頁。

(26) ただ、劉曉南「說文連篆讀獻疑」(『古漢語研究』一九八九年第一期、湖南師範大學、二〇一八頁)のように妥當性を疑問視する説もある。

(27) 『文選(全三冊)』、中華書局、一九八一年、四二二頁。

(28) この説話については、小島祐馬「分野説と古代中國人の信仰」(『古代中國研究』、平凡社『東洋文庫』、一九八八年、四七—七四頁)が詳しい。

(29) 注(13)前掲書一七八—一七九頁。

(30) 張一弓點校『經典釋文』、上海古籍出版社、二〇一二年、一五二頁。

(31) 「文」字は「又」字の誤りかもしれぬ。

(32) 注(30)前掲書、六六一頁。

(33) 周祖謨校『廣韻校本』、中華書局、二〇一一年、四七頁。

(34) 注(20)前掲書五八頁。

(35) 近年、張涌泉は『說文』連篆讀發覆(『文史』二〇〇二年第三輯、中華書局、二四八—二五三頁)において、複舉字説と連讀説とは別に、元々は小篆の下に「二」のような文字の繰り返し記號が付いていたはずであり、それが後に脱落したという説を述べている。これは莫友芝の説を受け継いだものであるという。莫友芝は前掲の『唐寫本說文解字木部

箋異評注』によると『木部』「械二窰，褻器也」條に「『二』豐篆『械』字。按：此知傳本解說首字同篆者，率以『二』書之」(『二』は篆字の「械」字を繰り返すという意味の符號である。按ずるに、ここから、この寫本の說解の第一字目が篆字と同じ場合は、その字をみな『二』という記號で表していることが分かる)と按語を附している。